

# マアジの新規加入量調査

(資源評価調査)

安原 豪・寺門弘悦

## 1. 研究目的

本県のまき網漁業や定置網漁業の主要漁獲対象種であるマアジの新規加入状況を早期に把握するため、日本海南西海域におけるマアジ幼魚の分布状況を推定するとともに同海域への新規加入量の推定を行う。また、得られたデータはマアジ対馬暖流系群の資源評価における新規加入量の指標値とする。

## 2. 研究方法

本研究では、(国研)水産研究・教育機構、鳥取県水産試験場および山口県水産研究センターと共同で中層トロール網による一斉調査(令和2年5月～6月)を実施し、その結果を基に新規加入量の推定を行った。

調査定点は、一斉調査(1回目:5月25日～29日、2回目:6月8日～10日)で島根県西部沖の14点であった(図1)。曳網水深は30～50mとし、曳網速度は3ノット、曳網時間は30分間とした。一斉調査から得られた結果について関係機関と共同で解析し、マアジの加入量指数を算出した。

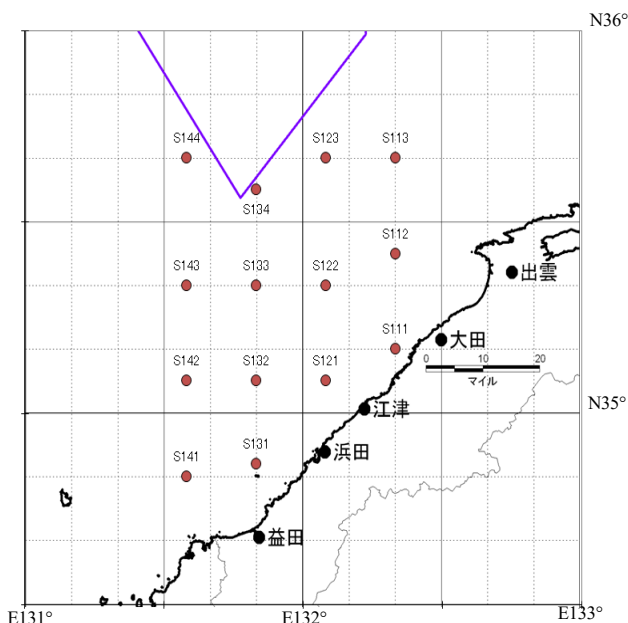


図1 マアジ新規加入量調査の調査点

## 3. 研究結果

マアジ幼魚の1曳網当りの採集尾数は、1回目が327尾、2回目が41尾であった。

図2に境港におけるまき網1ヶ統当りのマアジ0歳魚の漁獲尾数と加入量指数との関係を示した。一斉調査の結果から算出した2020(令和2)年の加入量指数(2003(平成15)年を1とする)は1.35であり、昨年(2019(令和元年)年:0.70)を上回った。

一方、2020年の0歳魚の漁獲尾数は前年(2019年)を下回っており、近年(2015(平成27)年以降)の加入量指数との相関が弱くなっている傾向が見受けられる。

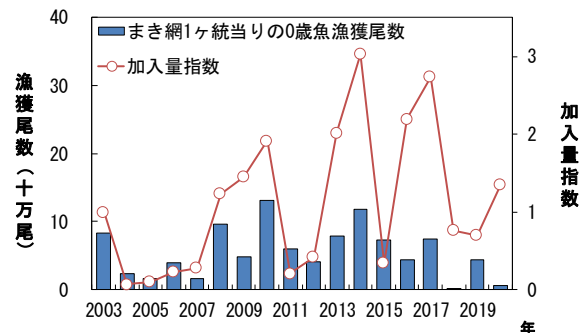


図2 境港におけるまき網1ヶ統当りのマアジ0歳魚の漁獲尾数(6～12月)と加入量指数との関係

## 4. 研究成果

本調査結果はトビウオ通信(令和2年第7号)で報告した。また、研究結果はマアジ対馬暖流系群の資源評価におけるマアジ0歳魚の指標値として使用され、これをもとにABC(生物学的許容漁獲量)が算定され、TAC(漁獲可能量)が設定された。